



オリーブ山での説教

イスラエルを時計の針と逆に回って、”the place where it all began”と豪語しているエルサレムに入ったのは日曜日でした。まず、私たち一行はエルサレム旧市街の岩のドームの真向かい、ケデロン谷の東のオリーブ山に登りました。ここで、エルサレムを見ながら主の日の礼拝を守りました。日毎の糧の日課は「荒野の誘惑」(ルカ 4:1)の記事でした。吉岡牧師はイエス様が地の最も低い場所、死海のほとりのユダの荒野で、宣教のスタートを切ったという事は非常に象徴的なことである、低きに下られた神の子、低さを知られる主であるとメッセージをしてくださいました。

ここからエルサレムの町を展望できます。岩のドームが黄金に輝き、すべての建物がエルサレム石と言われる乳白色の石で造られているため、日に映えて美しく、その町並にただ圧倒される気持ちでした。イエス様がここで眺められたエルサレムよりは格段に大きい町になったかもしれませんが、イエス様の時代には「美しの門」があったかもしれない場所に、①「黄金の門」があり、モリヤの山のイサクを捧げた岩の上に、神殿が立っていたのですから、同じ光景ではないかと心躍らせましたが、「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」(ルカ21:6)と言われたイエス様の言葉を思い出しました。現実的に岩のドームの立つ神殿の丘はイスラムの聖地であり、ユダヤ人に残されているのは西の外壁、嘆きの壁だけです。目に見える、形の有るものに目を奪われてしましますが、パウロが言っているように、わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。(IIコリ4:18)との言葉に心を止めていきたいと改めて思いました。

礼拝した場所のすぐそばにある、1955年に廃墟から再建されたフランシスコ会の②「主の泣かれた教会」に行きました。イエス様はエルサレムの葉ばかりが茂り、実のない様子を嘆かれたのです。会堂の形は涙の滴を象徴しています。この地下から、青銅器時代のカナン人からイエス様と同時代を経て、さらにビザンチンまでの墓地が発掘されています。土葬してから数年後、骨を洗い小さな石棺に改葬するという形式が取られたようで、様々な石棺がありました。

そこから少し下ったゲッセマネに1924年に建てられた「万国民の教会」と名付けられたビザンチン様式のカトリック教会があります。その聖壇の前にイエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。(ルカ22:44)と記されている場所だとされる岩があります。聖壇に近づけないほど人々が覗き込んでいました。岩が大きくて、一つに続いているからと言われ、見ると、岩は会堂の外の庭にまで伸びていました。その岩に③浮彫されているイエス様の姿を見つけました。

オリーブ山は観光者、巡礼者で大賑わいでした。ガイドに、スリがいるので用心するように何度も注意されながら、又、前日の雪で道路が凍結していたり、濡れているから用心するようにと、「ゆっくり、ゆっくりね」と声をかけられましたが、見るべき予定の場所が沢山あるようで、オリーブ山で祈られたイエス様に思いを寄せる暇もなく歩きます。ゲッセマネの園はフェンスで囲われていました。皆が木に触り、傷むからだとのこと。④巨大なオリーブの木をチラと眺め、山を下りました。



①閉ざされている黄金の門



②主の泣かれた教会



③ゲッセマネの祈りの岩



④ゲッセマネのオリーブの木